

## 実践報告

# 専門職大学院における文章表現演習（その1）

花田 修一<sup>1</sup>

本稿は、平成 23 年度から新しく開講した本学の「文章表現演習」の授業内容を中心に記述したものである。本授業では、次のような演習を行ってきた。①文章表現に関する基礎的知識や基本的技能、②新任者としての自己紹介文、③専門教科（科目）を学ぶ意義に関するメッセージ文、④学級（ホームルーム）担任としての呼びかけ文、⑤生徒に読ませたい図書の推薦文、⑥進路先への生徒に関する推薦文などである。

本稿では、①②③の実践を中心に報告する。④⑤⑥については『教育総合研究』第 6 号（2013 年）で報告する予定である。

ところで、今日学校教育において論理的思考力や論理的表現力、言語力や言語活動の充実、情報や資料の活用力や多様な価値観の認識力などの育成が強く求められている。そのためには、これらの能力や態度などを生徒に指導できる教師の力量が必要となる。

以下、その一環として、「文章表現演習」の授業について、授業資料や学生の文章などを基にして実践報告をしつつ、その教育的有効性を一層明らかにし、教師育成のための専門職大学院教育における「文章表現演習」の実践的研究開発の一助としたい。

**キーワード：**文章表現、言語活動、論理的表現力、情報活用力、文章批評、多様な価値観

## I 本授業の概要

### 1 本授業の目的

本授業は、本学を修了後、中学校及び高等学校の教師を目指す学生を対象として開講したものである。授業では、優れた専門職としての教師になるための「文章表現法」の基礎的な知識や基本的な技能を身に付け、その実践的な活用能力を一層高め、教師としての素養や資質をさらに高めること。また、多様な「文章表現法」の演習を通して、これからの中学生及び高校生に対しても、目的や相手や文種などに応じた確かな文章力を身に付けさせることができる指導力や授業力を高めることを目的としたものである。

なお、本授業は、選択科目の一つである。受講者は、国語科 10 名、社会科 8 名、数学科 2 名、

1 日本教育大学院大学 学校教育研究科

理科2名、英語科1名の全23名である。座席はペアやグループが組み易いように工夫し、また、他教科との交流ができるように配慮した。

## 2 本授業の方法と計画

本授業の方法は、まずは、表現とは何か、文章表現とは何か、よい文章表現の条件とは何かについて、授業者の話や受講者の話し合いから始めた。その後、要旨で示したように、①文章表現に関する基礎的知識や基本的技能、②新任者としての自己紹介文、③専門教科（科目）を学ぶ意義に関するメッセージ文、④学級（ホームルーム）担任としての呼びかけ文、⑤生徒に読ませたい図書の推薦文、⑥進路先への生徒に関する推薦文などの文章表現演習を展開した。全15時間計画である。その具体的な授業の方法と内容については、①②③を中心に後述する。

## 3 本授業の評価

本授業における評価は、出席率（30パーセント・毎時間の評価と反省の記述内容）、演習や発表の内容と参加態度（40パーセント）、定期試験（30パーセント・授業後の筆記試験）などを総合的に判断して評価した。また、この成績評価の方法については、最初の授業で学生に明示した。

# II 文章表現演習の授業の実際

## 1 第1講の授業内容

まずは、本授業のねらい・方法・計画・成績評価について、シラバスを基に授業者から説明した。続いて、表現（Expression）の語義、表現の方法（身体・絵画・音楽・造型・映像・言語・総合など）のそれぞれの特質について授業者が講義した。そして、本授業では、言語表現を中心とした「文章表現」について演習することを確認した。

次に、「よい文章の条件」とは何かについて23名の受講者と話し合った。次に示すような条件が挙げられた。（複数回答）

- 段落などの文章構成に関すること。（7名）
- 読み手を考えた文章に関すること。（5名）
- 明確な主張やテーマに関すること。（4名）
- 読みやすい文字や漢字に関すること。（4名）
- 具体例の挙げ方や例示に関すること。（4名）

そのほか、比喩や倒置など表現技法に関すること（2名）、共感や印象を与える内容に関すること（2名）、短く簡潔な文に関すること（2名）、ジャンル（文種）に応じた内容に関すること（2名）、主述や修飾語の確かさに関すること（1名）、語句や敬語の適切な使い方などに関すること（1名）、インパクトのある冒頭文の書き方に関すること（1名）などが挙げられた。

以上の話し合いの内容をふまえ、授業者は、次のように整理して示した。

- 1 なんのために書くのか・・・目的意識を明確にして書くこと。
- 2 だれに向かって書くのか・・・相手意識を明確にして書くこと。
- 3 なにについて書くのか・・・主題意識を明確にして書くこと。
- 4 どんな順序で書くのか・・・構成意識を明確にして書くこと。
- 5 どのように書くのか・・・記述意識を明確にして書くこと。
- 6 思うように書けたか・・・推敲意識を明確にして書くこと。
- 7 書いたものを反省できるか・・・評価意識を明確にして書くこと。

また、昔からよく引用される文章上達法の「三多」(中国宋の時代の詩人・欧陽修)の提唱について次のことを補説した。

- 1 看多(かんた)・・・優れた文章を多く読むこと。多読の勧め。
- 2 做多(さた)・・・文章を多く書くこと。多作の勧め。
- 3 商量多(しょうりょうた)・・・文章を多く工夫して書くこと。推敲の勧め。

さらに、「文は人なり」という格言も紹介し、達意の文章は、結局その人の全人格が反映することも付け加えた。次講の予告をして、第1講の授業を終えた。

## 2 「新任者としての自己紹介文」の授業の実際

将来、受講者が中学校及び高等学校の教師になった場合、PTA 広報新聞や生徒会誌などに必ず「自己紹介」の文章を依頼されることになる。そのために、「PTA 新聞に新任者としての自己紹介文を書く」(約 400 字)という授業を 2 時間設定した。1 時間目は、書いてきた自己紹介文をペアで読み合い、相互に助言するという方法をとった。2 時間目は、相手の助言をもとに再度書き直して、グループ(5 班)になって回し読みをして交流する。その後、グループの代表者が全体に発表するという形態にした。助言や相互評価の際、言語内容(認識法)と言語形式(表現法)を土台にして、次のような観点から文章を観るように指導した。

- 1 目的意識は明確であるか・・・新任者の自己紹介であることを考えて書いているか。
- 2 相手意識は明確であるか・・・読み手(保護者や生徒や同僚)のことを考えて書いているか。
- 3 主題意識は明確であるか・・・紹介したい内容を焦点化して書いているか。
- 4 記述意識は明確であるか・・・言葉の使い方や表記法などを考えて書いているか。

次に示すのは、受講者の自己紹介文である。一部引用する。実物は縦書きの原稿用紙(以下同じ)。

### (1) 国語科専攻の文章(中学校を対象)の事例

みなさん、今日は、4月から本校に赴任した大林啓一(仮名・以下同じ)と申します。担当する教科は国語です。赴任して早くも2か月が過ぎようとしています。一年前の7月は、教員採用試験に向けて緊張と焦りの中で過ごしていました。

そして今、念願だった教師という仕事がスタートしました。去年とはちがった緊張感ですが、それは「やりがい」のある毎日の緊張感です。教師という職業は、生徒達に関わるすべての方々に対して、責任のある仕事だと考えています。そして、その緊張感が、私の生活に心地よい刺激を与えてくれています。

学校生活というものは、毎日が同じような単調な繰り返しと思われることがあります。ですが、実際は何一つ同じことはない新鮮な瞬間の連続です。私は、生徒達に対してその新鮮な瞬間の提供者であり続けたいと願い、実践してまいります。

これからもよろしくお願いいたします。

## (2) 社会科専攻の文章（高等学校を対象）の事例

「困っている人を見かけたらすぐに声をかけよう」をモットーとして自分に言い聞かせている竹田文章と申します。この度晴れて本校に参ることができました。この3月までは、東京にある日本教育大学院大学で、2年間教師を目指して学んでおりました。私には、高校教師として達成したいことが二つあります。

まず、担任として受け持ったクラスに責任を持って、健全な学級運営をしていきたいということです。生徒一人ひとりが活躍の場となるホームルームを作るように努力いたします。次に、社会科教師として、教科書だけに頼ることなく、生徒の五感に刺激を与えるような授業を行いたいと考えています。また、生徒に対して一方的に知識を与える授業にならないように様々な工夫を施していきたいと思えます。

新任者であり現場経験の乏しい私ですが、校長先生を始め教職員の皆様、保護者の皆様、そして生徒の意見を親身になって受け止め、熱い情熱と若さでがんばっていききたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

## (3) 受講者の反省と自己評価の事例

この2時間の授業を終えて、受講生たちは次のような反省や自己評価を述べた。授業後に全員が提出する「本時で学んだことや問題意識や感想・意見など」から、一部引用する。

- 他者の自己紹介文を読んで、自分の語彙力のなさを実感しました。それと同時に、内容も構成も常に意識していなければならないと思えました。また、文章を書いた後、しばらく時間をおいてから読み直し、推敲することが必要だと思えました。時間を空けることで、自分の文章をより客観的に、冷静に見つめることができるからです。
- 自分の文章を批評してもらえたり他者の文章を評価するという訓練はこれまでに経験がありませんでした。文章作成のよい体験をしました。
- 三人で回し読みをしたが、それぞれに個性が出ておもしろかった授業です。自分にはないアイデアがたくさんあり、自己紹介文一つとっても様々な書き方があることを学びました。みんなが評価してくれたことをもとに反省し、さらによりよい自己紹介文をもう一度作成したいと思っています。

### 3 「なぜ〇〇を学ぶのかのメッセージ文」の授業の実際

表題に示した「なぜ〇〇を学ぶのかのメッセージ文」の授業を3時間設定した。〇〇というのは、自分が担当する専門教科名のことである。400字程度とした。

文章にまとめる前に、前時で学んだように、次のことを指示した。

- 1 担当教科の特質や内容などを意識して書くこと。（目的意識の確認）
- 2 担当する生徒（読み手）を考えて書くこと。（相手意識の確認）
- 3 伝えたい中心的な内容を押さえて書くこと。（主題意識の確認）
- 4 生徒にわかりやすい表現を考えて書くこと。（記述意識の確認）

以下に示すのは、各教科や科目の受講者の文章である。一部引用する。

#### （1）国語科専攻の文章（高校1年生を対象）の事例

国語とは、読んで字のごとく、国の基本となる日本人が学ぶ必要不可欠な学問なのです。みなさんは、小学校に入学して9年間、日本語の文字や文章の読み書きを学んできたことでしょうか。人が人らしくなっていく基礎が作られていくのが、国語という教科なのです。

高等学校における国語は、現代文では、随想・評論・小説・詩・短歌・俳句などがあります。例えば、評論では『失われた両腕』、小説では『羅生門』などの文章を読みます。それらの学習を通して、思考力や読解力や状況把握力などの力を身につけるのです。また、古文や漢文などの古典もそれぞれに学ぶ意味があります。討論をしたり、意見文を書いたりして、論理的に考えたり、表現したりする力も国語の授業で身につけます。

このように国語を学ぶことで、豊かな感性や言語感覚や想像力や思考力が養われていきます。

人格を形成していく上で必要な要素というものが、すべて国語に含まれていると言えます。

#### （2）国語科専攻の文章（中学1年生を対象）

今日は、私達が国語を学ぶ必要性について考えてみましょう。みなさんは、どんな技術を身につけていれば、将来社会に出たときに役に立つと思いますか。英語を滑らかにしゃべれば、国際社会で活躍できるかもしれません。パソコンを手足のように使えば、どんな会社に勤めても重宝されることでしょう。

しかし、それだけでは社会人として一流とはいえません。将来、国際社会で活躍していくためには、日本人独自の発想や文化などを持ち合わせていなければ、周りの期待に応えられないかも知れません。どんなに優れた技術を持っていても、自分自身の考えをしっかりと持ち、それを相手に正確に伝えることができなければ、周囲の信頼を勝ち取ることはできないでしょう。

これからの授業では、なぜ国語を学ぶのかということについて、みなさんと一緒に話し合っていきたいと思います。正確な言葉を使って人の心をつかみ、興味を引きつけるような話し方をするためにも、まず国語を学ぶ必要があるのです。

#### （3）社会科専攻の文章（中学1年生を対象）

最近、連日のように各種メディアが「尖閣諸島」をめぐる日中間の緊張について報道していま

す。これらの情報を見聞きして、みなさんはどのように感じたり、考えたりしていますか。尖閣諸島って何？ どこにあるの？ 緊張ってどんな？ おそらく見聞きしただけではわかりにくいことが多いのではないのでしょうか。

このような自分が抱いた疑問は、どんな些細なことであっても大切にしてほしいと思います。「疑問という種」をこの3年間で学ぶ「歴史・地理・公民」という領域の「栄養素」を通じて一緒に育てていきませんか。そして、見聞きしたものをただ受け止めるだけではなく、自分なりの考えや意見という「花」として咲かせませんか。

社会科は、過去を知り、現在を見据え、未来を切り開いていくための基本（ベース）となる教科です。社会科なんて、と最初から毛嫌いするのではなく、多くの視点から見つめ直してみませんか。

#### (4) 社会科（世界史）専攻の文章（高校1年生を対象）

みなさん、宮澤賢治という人を知っていますか。『銀河鉄道の夜』や『雨にも負けず』などの作品を書いた童話作家・詩人です。「世界史の授業なのに、なんで宮澤賢治？」と思った人いるでしょう。実は、ぜひみなさんに読んでもらいたい文があるのです。それは、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない・・・われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である（『農民芸術概論要綱』）」という部分です。

世界史を学ぶ意義というのは、結局ここにたどり着くと思っています。いや世界史だけではなく、学問のすべてであるのかもしれませんが。ところで、宮澤賢治の言う「世界」という言葉、これは何を意味するのだと思いますか。家族、親戚、友達、日本人、いやそれとも世界中の人達かな？ 彼は「自我の意識は個人から集団社会宇宙へと次第に進化する」と言っています。つまり、人間だけではなく、地球上のすべての生物、自然、そして宇宙のことまでが、彼にとっての「世界」ということなのです。

いま、私達が生きている日本はとても豊かで幸せな国です。でも、この豊かさ、幸せというのはどこからくるのでしょうか。いま、この瞬間に、どこかの場所では、水がなくて、食べ物がなくて、戦争で、だれかが死んでいるのです。私達は私達だけが幸せでいいのでしょうか。

過去の歴史を学ぶことで、私達は今まで人間のしてきた光と影とを知ることができます。光と影のどちらも知ることが必要なのです。もちろん受験勉強も大事だけど、世界史を学ぶことにはもっと大切なことがあるのです。そのことを忘れずに、これから一緒に世界史を学んでいきましょう。

#### (5) 数学科専攻の文章（高校1年生を対象）

「生きる」ということは、大人になってから解き続けていかななくてはならない方程式です。その「大人の方程式」は、答えが一つではなく、いくつもあるのです。かといってどんな答えでもいいわけではありません。正解といえる答えは二つか三つあります。

「数学」は、考えたり行動したりする「プロセス」を訓練する科目なのです。一つの問題を解

くとき、その答えを出すまでには「プロセス」というものが必ずあるのです。答えは一つでも、プロセスは何通りもあります。数学では、そのプロセスを発見できるかどうか重要です。つまり、数学は「答えを出す」ためだけの勉強ではなく、「プロセスを発掘する」勉強と考えてください。それは、生きることの縮図でもあります。生きるために数学を学ぶのです。

ただし、人生の場合、途中で解き方や出すべき答えが変わったりすることがあります。そこが数学と違うところです。だから、人生は数学よりも難しい。少しは、数学を学ぶ気になりましたか？

#### (6) 理科専攻の文章(中学3年生を対象)

なぜ、理科を勉強するのでしょうか。

理科の授業でものの見方や考え方を学ぶことは、様々な物事に応用することができるのです。一方通行的なもの見方ではなく、客観的な視点をもつことができるようになります。また、社会に出て働くために重要な要素の一つである問題解決能力も身につけることができます。「科学はわからないけど大切だと思っている」というだけでは、これからの科学技術の社会を生きていくことはできません。私たちは、正しい知識を身につけ、だまされることなくこの時代を生き抜いていかなければならないのです。科学技術を十分に身につけるための基礎基本を学校の「理科」という授業で学んでいくのです。

私たちの使っている技術は、はるか昔の人たちの知恵と努力の結晶でもあります。遠くに行くために自転車を作り、大量なものをより遠くまで運ぶために蒸気機関車や自動車を開発してきました。多角的なもの見方や考え方、様々な実験実習のスキル、問題解決能力、自然現象に疑問や問題を抱く心、宇宙の神秘や星座などに心をときめかすことなどを、理科の授業で学んでいきましょう。

#### (7) 理科(化学)専攻の文章(高校2年生を対象)

みなさんは、何のために「化学」を学ぶと思いますか？ 受験に必要なだからという気持ちだけなら、その考えを捨ててください。「化学」とはいったい何なのか、これまで学習してきたことを振り返ってみてください。元素記号、化学反応、難しい化学式……。そんな印象をもっていないませんか。しかし、それは化学の本質ではありません。

「化学」とは本来「文化」なのです。化学は台所で生まれたと言われています。暮らしに豊かさをもたらしたい、そんな思いから化学は発展してきたのです。科学は私たちの生活に密着し、暮らしに豊かさをもたらしてきたのです。

「化学」を学ぶことは、人類の文化の発展を学ぶことなのです。そして、その文化を未来につなげること、これが「化学」を学ぶ目的だと考えています。「化学」の授業で学んだことを、文化の発展に寄与できるような人になってほしいと願っています。

#### (8) 受講者の反省と自己評価の事例

この3時間の授業を終えて、受講者たちは次のような反省や自己評価を述べた。授業後に全員が

提出する「本時で学んだことや問題意識や感想・意見など」から、一部引用する。

( ) 内は、受講者に対する筆者からのコメントである。次時に返却するようにしている。

- いかにか情意的に、そしてインパクトを生徒に与えるかということがポイントだと思いました。これは表現技術（スキル）でもあり、経験がものをいうのではないかと考えています。書く目的意識が明確で、説得力のある文章が書けるようにしていきたいと思います。（担当する教科を生徒に学ばせたいという愛情からインパクトのある文章が生まれると思います。さらに推敲を重ねてください。期待しています。）
- 自分が書いたときに違和感を覚えた部分を友達に指摘してもらったことで、新しい表現が生まれました。私は、文章を書いているうちに自分が設定したテーマがぶれてしまうことがあります。軸をしっかりと決めて、そこから文章を作っていかなければならないと自覚しています。今回自分が決めたテーマは、「受験のためだけの国語ではない」というところだったので、もう一度、その軸からぶれないように再構成したいと思います。（友達の批判から学ぶことができよかったですね。これが、授業における学び合いということです。何度も繰り返し直してよりよい文章に仕上げてください。）
- 「文は人なり」というが、まさにそのとおりでした。文章の中に自分の弱さや自信のなさが表れていました。そういった欠点は、他者に指摘されて初めてわかるものであり、自分自身を客観的に見つめることがいかに難しいかがよく理解できました。将来の国語教師として、生徒の模範になるような文章を書きたいと思います。（文章は、表現法とともに認識法も大切です。自分の担当する教科の本質をとらえ、なぜそれを専門として教えるのかを問い続けることです。S君の場合は、常に言葉の修業を続けることです。）
- 他の教科の学ぶ意義の文章を批評することで、様々な視点から「伝える」という方法を知ることができてよい勉強になりました。先生がおっしゃった「学ぶ意欲」を持たせるという視点が私たちのグループでは少し弱かったようです。また、学年発達などの生徒の立場を考えた表現力を身につける必要があることを学びました。（素直な反省や相互評価を受け入れることで、さらに文章力は向上するものです。）
- 読み手である生徒の立場をふまえて、文章を構成することの重要性を改めて考えさせられました。書き手である私自身の思いがあふれる、心に残るような文章が書けるように努めています。他教科の人たちとグループを組んだことで、他教科の目的や目標などが見えたのもよい勉強になりました。刺激的なグループでの相互評価の時間でした。（生徒の立場を考えて表現するのが、教師の仕事です。一度書いた文章を何度も推敲することで、表現力は伸びていくものです。書くという意欲を大切に育ててください。）
- 友達の文章を批評することで、文章の組み立て方や表現の方法など、自分に不足している技能を見つけてことができました。他者の考えの引用法だけでなく、文章全体の流れや言葉の使い方など知識量の差が文章に出てくると感じました。（まさに、文は人なりを実感しまし



たね。文章力は、その人の総合力が如実に表れるものです。このことを、教師になったら生徒にも伝えてください。)

- 自分の専門以外の「なぜ○○を学ぶのか」を聞いたのはこれが初めてでした。小・中・高と学んでくる中で、自分ではなんとなく考えてきたことが、今回の発表をとおしてよく理解できました。これを小・中・高時代に聞いておけばもっと意欲的に学んだらろうと思います。生徒に「学びたい」という意欲や知的好奇心を持ってもらうためには、最初の授業で、「学ぶ意義」のメッセージを伝えたいと思います。(教師になったら、ぜひともこのメッセージを生徒に伝えてください。また、他教科の先生達ともこの方法を共有してください。)
- 文章の中に具体例を挙げて書くことの大切さを学びました。例えば、「尖閣諸島」といった言葉を挙げることで、生徒の興味や関心を呼び起こすことができるということです。生徒に対して「教科を学ぶ意義」を伝えられて初めて授業内のコミュニケーションが円滑に進むのではないかと思いました。教科にける「学ぶ目標」が明確であるということは、重要なことです。後は、生徒に問いを投げかけつつ一緒に向き合っていけたらいいなと考えています。(生徒の視点に立って考えるということは大切なことです。コミュニケーションという気持ちを忘れずに生徒と授業を創出してほしいと願っています。)

### Ⅲ 本授業の成果と今後の課題

以上、「専門職大学院における『文章表現演習』(その1)」の一部について、実践報告をしてきた。「要旨」でも述べたように、本稿では、「文章表現に関する基礎的知識や基本的技能」「新任者としての自己紹介文」「専門教科(科目)を学ぶ意義に関するメッセージ文」の授業内容に焦点化して報告した。

本授業の成果を整理すると次のようなことが言える。

- 文章表現演習に対する受講者のモチベーションが高まったこと。
- 文章表現に関する基礎的知識や基本的な技能を演習で習得したこと。
- 学校現場における様々な文章表現法の有効活用を開発したこと。

本授業で筆者が期待していた「文章表現法の向上」「論理的表現力の習得と活用」「認識力の深化・拡充」「情報活用力」「文章批評力」「多様な価値観の認識」なども、おおむね受講者の身についたと考えている。受講者一人ひとりが推敲や相互評価を演習することによって、文章表現力は確実に上達している。また、発表に対する筆者からのコメントもできるだけ具体的に明示した。それは、次のような受講生の授業評価(平成23年1月25日・火に実施)からも伺うことができる。

- この授業を受ける前までは、ただただ書いていただけであった。現在は、目的意識・相手意識・主題意識・構成意識・記述意識などを考えて書くようになった。また、これまで自分の

書いた文章を他者に読んでもらって指摘されることが苦手で避けていた。が、他者の目が入ることで気づく点があるということがわかり今ではその重要性を感じている。書きっぱなしにせずに推敲してよい文章を書くことの大切さも学んだ。さらに、日ごろから書くことの訓練も必要であることを実感した。

- 半期 15 時間受講して最も強く頭に残っていること、それは「読み手を意識して文章は書かなければならない」ということである。自分が書いた文章は、いつ、どこで、だれが、どのように読むのかはわからない。だからこそ、読み手を強く意識して、主張したいことをどう伝えるかを考えなければならぬと感じた。また、課題をもって強制的に書くという経験を通じて、文章にまとめることの楽しさやおもしろさを実感することができた。
- いちばん学んだことは、自分の「力のなさ」である。今まで、文章表現それ自体を考えたことなどなかったからだ。「無知の知」ではないが、自分の分際をしっかりとわきまえてこれからも書く努力をしていこうと思う。僕は「言葉」が好きだ。
- 文章を書くうえで大切なことは、「現状に満足しないこと」だということを学んだ。人に自分の文章を批評してもらい、率直な意見を聞く機会を得ることができ、「この授業をとってよかった」と感じている。これからもよい文章に触れることで、自分自身の文章力を高められるように努力を重ねていく決意でいる。
- 自分で書き上げたものを相互に批評することで、様々な書き方や表現の仕方があることを学べた。また、繰り返し推敲することで、自分の文章の癖などを見つけ、悪い部分を直すよい機会となった。これからは、公の文章を書くことが今以上に増えるので、この演習で得た力を発揮し、まだ自分に足りない部分を補っていかなければならぬと気を引き締めている。
- 相互評価における批評や批正などで謙虚に他者の意見を聞き入れることができ、自己成長できたと思う。また、いろいろな形態の文章を書いたことにより、表現力や認識力も身についた。
- 文章を書くことが苦手なのでこの授業をとった。今までは、文章を書くときには、とりあえず自分が思いついたことを書いてきたような気がする。この授業で、文章を書くための意識すべきポイントが学べた。よい文章を書くためには、多くの文章を読まなければならないと思ひ、以前よりも本を読む量が増えた。特に、新聞などの身近なものから読んでいくように心がけたい。

今後は、さらに多様な文章の形態にも挑戦させ、その効果的な表現法や有効な方法の開発に取り組んでいきたい。それはまた、現在及び将来にわたって学校教育に求められている「言語力」育成のために、「言語活動」の具体的な実践的研究課題でもあると考えるからでもある。受講者の推敲前と推敲後の文章比較やその分析及び筆者の具体的な指導助言については、次号で紹介する予定である。

**(引用文献及び参考文献)**

- 芦永奈雄 (2010) 『コミュニケーション力を高める文章の技術』 フォレスト出版
- 荊木美行 (1997) 『大学生のための知的文章術』 燃焼社
- 内山力 (2011) 『論理的な伝え方を身につける』 PHP 新書
- 大島弥生他 (2009) 『日本語表現能力を育む授業のアイデア』 ひつじ書房
- 小笠原信之 (2011) 『伝わる! 文章力が身につく本』 高橋書店
- 沖森卓也他 (1998) 『日本語表現法』 三省堂
- 加藤典洋 (1996) 『言語表現法講義』 岩波書店
- 黒木登志夫 (2011) 『知的文章とプレゼンテーション』 中公新書
- 工藤順一 (2010) 『文章術』 中公新書
- 齋藤孝 (2010) 『人を動かす文章術』 講談社現代新書
- 高崎みどり他 (2008) 『ここからはじまる文章・談話』 ひつじ書房
- 中村明 (1997) 『文章力をつける』 日本経済新聞社
- 中村明 (2011) 『語感トレーニング』 岩波新書
- 成川豊彦 (2010) 『成川式文章の書き方』 PHP 研究所
- 西村克己 (2006) 『論理的な文章の書き方が面白いほど身につく本』 中経出版
- 野内良三 (2010) 『日本語作文術』 中公新書
- 花田修一 (2010) 「専門職大学院におけるディベート的討議演習 (その3) -ディベートの教育的有効性とその実際-」 『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要 第3号』 PP.95-118
- 花田修一 (2009) 「専門職大学院におけるディベート的討議演習 (その2) -ロールプレイングの教育的有効性とその実際-」 『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要 第2号』 PP.97-111
- 花田修一 (2008) 「専門職大学院におけるディベート的討議演習 (その1) -インナースピーチとペアトークの教育的有効性とその実際-」 『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要 第1号』 PP.49-65
- 花田修一 (2010-2011) 「表現力の開発」 『教育科学国語教育』 (2011年4月号から2012年3月号までの12回にわたる連載稿) 明治図書
- 花田修一 (2010) 「『言語力の育成』なぜ強調されるのか-適切な言語運用力が人間力を育む」 『現代教育科学』 (3月号) 明治図書 PP.11-13
- 花田修一 (2010) 「『習得・活用・探求』学習-国語科学習の転換-実践的言語活用力を育てよう」 『現代教育科学』 (5月号) 明治図書 PP.59-62
- 花田修一 (1999) 『「伝え合う力」とは何か-ある国語教室からの発信-』 三省堂
- 花田修一 (1999) 『「書くこと」の授業改革-情報化対応の作文技術-』 明治図書

- 飛田多喜雄他（1975）『文章表現の理論と方法』明治図書  
樋口裕一（2000）『ホンモノの文章力』集英社新書  
平井昌夫（1972）『文章を書く技術』社会思想社  
平井昌夫（1976）『文章上達法』至文堂  
藤沢晃治（1999）『「分かりやすい表現」の技術』講談社  
茂呂雄二（1988）『なぜ人は書くのか』東京大学出版会  
山崎康司（2011）『入門考える技術・書く技術』ダイヤモンド社

花田修一 実践報告：専門職大学院における文章表現演習(その1) へのコメント

吉良 直(日本教育大学院大学 学校教育研究科 教授)

本実践報告は、花田修一教授が、教員養成系の専門職大学院において今年度から開講した「文章表現演習」の授業内容を、学生の文章や感想を中心にまとめたもので、非常に興味深い内容である。本稿では、本演習の前半部分をまとめており、「新任者としての自己紹介文」、「なぜ専門教科(国語、社会など)を学ぶのかのメッセージ文」といった非常に実践的な文章表現の演習が行われていることがわかる。花田教授が、長年の学校現場での体験を基に、新任教員にとって非常に重要になる文章表現法を指導し、受講生同士がコメントし合い、有意義な学びの場が確立されている。文章を書く場合の目的意識・相手意識・主題意識・記述意識を明確にすることが何度も強調されているので、受講生の文章表現力が向上していっていることが感想からもわかるし、同時に文章表現力だけでなく、受講生の教壇に立つ意識も高まっていることが窺われる。

本稿は、実際の受講生の文章や感想文を多用し、教員養成系の専門職大学院での実践報告として非常に興味深い内容なので、受講生数、科目の位置づけ、教室の配置、ペアや班活動の詳細、本稿に掲載された受講生の文章がどの程度修正されたものなのかなどの記述が加えられると、さらに実践報告としての価値が高まると考える。次回のその2が楽しみである。